

現場に役立つ援助の知恵

～特定テーマ評価「住民参加フェーズ2」報告書より～

特定テーマ評価「住民参加フェーズ2」より得られた教訓・学びのエッセンスを「援助の知恵」として取りまとめました。評価結果の詳細については、評価報告書「住民参加フェーズ2」をご参照下さい。

住民参加を評価するためには！？ 住民参加にはどのようなタイプが考えられますか？

住民参加に関して、これまでに多くの活発な議論がなされてきたことを踏まえても、“住民の（参加の）関わり度”を事業趣旨に照らして適切に理解し検証するための枠組みづくりが第一歩となります。(本文 2.2.1 項参照)

一般的に、「参加」という言葉は多様な定義がなされており、評価者によってその解釈は異なります。本評価では、プロジェクトにおける住民の関わりを前提として、参加のタイプを、①外部者の召集に応え動員され、外部者の強いコントロールの下で参加する「受動的」参加、②徐々に活動からの便益を実感し、住民と外部者が協力する、または住民が一定の機能を果たす「協力的/機能的」参加、③住民が主体的かつ能動的に活動を展開する「自律的」参加に分類しました。

これら参加のタイプは、プロジェクトの実施により必ずしも段階的に到達されていくものではなく、またすべてのプロジェクトが「自律的」参加を目指すわけではないと考えています。

住民参加の状況をどのように評価することができますか？

本評価では、住民参加アプローチを取り入れた案件であっても、プロジェクトごとに住民参加の位置づけや目標とする住民参加の度合いが異なっているという前提の下、住民参加のタイプを分類し、プロジェクト計画立案時に目指したタイプと、評価時に観察・分析されたタイプを比較することにより評価を試みています。(本文 2.2.3 項参照)

住民参加の度合いを評価するためには、住民参加の主体別に評価視点を整理したフレームワークに基づく量的な分析(本文 2.3.2 項参照)に加えて、活動当事者の住民や組織以外の関係者・外部者の行為・介入がどのように影響を与えたのかというプロセスを把握する質的な分析(本文 3.5 参照)を加えることが重要であると考えます。

住民参加型アプローチを用いた案件の計画時点において、特に留意すべき点は何ですか？

評価を効果的・効率的に実施するためには、プロジェクトの計画立案時に、関係者間で以下の点を明確に合意・決定しておくことが重要であると考えられます。(本文 2.4 項参照)

① 目指す参加のタイプと主体の設定

プロジェクトの目的や特性を踏まえ、プロジェクトが目指す参加のタイプを設定するとともに、参加の主体（＝評価の対象）を特定する。

② コミュニティの実施能力の評価

コミュニティの特徴は、異なる歴史、文化、慣習、地理的な条件、過去の援助経験などにより大きく影響を受け、それがプロジェクトの成果や持続性とも関連する。そのため、コミュニティが有する実施能力を評価し、どのような状況からプロジェクト活動を開始することができるのかを判断する。

③ プロセスを見るための計画づくり

プロジェクトの活動実績だけでなく、ステークホルダーの関わり、利害関係や意識変容がどのように推移したかを明らかにするため、プロセスを確認するためのモニタリング体制を整備する。

④ 参加型評価の実施計画づくり

住民参加の評価では、住民の行動や意識なども重点的に見るため、異なるプロジェクト関係者が可能な範囲で関与する参加型評価が望ましい。どの関係者がどの時期にどの程度評価に関与し参加する必要があるのかを明確にする。

⑤ 住民参加の用語の解釈

住民、組織、コミュニティなどの用語は、一般的に頻繁に使用されているが、関係者間で混乱・誤解しないよう、それぞれの定義を明確にする。



村人へのヒアリング調査（ガーナ）